

黒の絵の具でベタ塗りしたような……否、漆塗りの、まさに漆黒。

足元すら見えないその闇の中を、少女は走っていた。途中、幾度も足を取られ、転び、体中に傷を負っていた。自分では見て確認できずとも、無視する事の出来ない痛みがそれを示していた。それでも少女の足は止まらない。もはや息も絶え絶えでも、決して止めるわけにはいかなかった。

背後から聞こえる、少女とは別の息使い。しかしそれは少女のような荒いものではなく、ただひたすらに、楽しげな。楽しさと悦びが入り混じった、ニンゲンならざるモノの笑い声。

すなわち、モンスター。

ただ一見すればニンゲンの、種によってはニンゲンの少女と見紛う姿をしているそれは、しかし一見しただけでそれがニンゲンではない事が見て取れた。見る、と言うよりも感じる、と言う事が正しいだろうか。

もともと、少女を追いまわしているソレは、明らかにニンゲンとは違う特徴を備えていた。

背には蝙蝠の翼。手には刃物のような鋭い爪。赤く輝く瞳は、決して光を反射しているわけではなく、そのものが発光していた。獲物を追うには不利でありそうなその現象は、伊達でも酔狂でも無く、見つめる対象の正常な判断を奪う魔眼。もともと、それほど高位の物では無いのだが。

ジャイアントバット、と呼ばれるモンスターである。先上げた特徴以外は、他のモンスターの多間に漏れず、少女のそれではあった。

そして。

幾度目かの転倒の末、ついに少女が起き上がらなくなった。立ち上がろうとしている事は違いないが、もはやその幼い四肢は限界を超えていた。闇に閉ざされ見えては取れないが、ここは深い森の中。実際は大した距離を逃げてはいないのだから、少女の体力を奪うには十分であった。ぱきり、と少女のすぐ後ろで枝か何かを踏み砕く音が聞こえる。ろくに体が動かない少女は、かろうじて顔を後ろに向ける事が出来た。

闇の中に浮かぶ赤い双眸。その光に照らされ、恐ろしく輝く鋭い爪。しばらくの間静止した時間。やがて狩人は飽きたのか、ゆっくりとその爪を振り上げる。

そして。

少女に向けて、それは振り下ろされた。

「——！」

どん。

爆音で少女は目が覚めた。

開かぬ左の臉を軽くさすりながら、ゆっくりと体を起こす。

確か、野営地で仮眠をとっていたはず。彼女にしては珍しく、やや寝ぼけた思考を巡らせながら状況を確認しようとしていた。

乱雑に切った、毛先の揃わぬ前髪をかきあげ、虚ろな焦点を合わせようとする。

「敵襲！ 敵襲！」

その声でようやく覚醒する。疲れているな、と思いつつも傍らに置かれていた剣を手を取った。

「何があった！」

テントから出ると、既に視認できる範囲で戦闘が始まっていた。

右往左往する兵士達に問いかける。予想以上に深い眠りに落ちていたであろう自分を恥じながらも、碌に伝令も出来ない兵士に不快感を覚えた。

「ふ、副長！ 申し訳ありません！」

慌てて繕おうとする兵に、いいから、と先を促す。

「モンスターの大隊が、突然この周りに現れて……！」

「突然、だと？ 見張りは何をやってた！」

一兵士にそのような事を叱責しても仕方がないのだが、焦りか、あるいはそれがいつもの事なのか。とにかく、焦っている事は間違いなかった。この隊が置かれている状況が芳しくない事が見て取れたからだ。野営地は完全にモンスターに囲まれ、熾烈な戦闘が繰り広げられている。だから、はやく剣を抜き前線に駆けだしたい。とはいえ現状が分からな過ぎる。歯痒い。早くモンスターを斬り裂きたい。

普段からこのようにゆとりの無い、そして危うい思考をしている上司に、兵士もまた不満を持っているが、その剣の腕が確かである事はわかっていた。そして、剣の腕だけの少女を副長に置かざるを得ない今の状況もまた、理解していた。

マルゲリータと言う家名の王族が治めるこの土地は、滅亡の危機に立たされていた。

ニンゲンとモンスター。相容れない仲とは言え、それでも両者が互いの領地を犯す事はそれほど多くは無かった。力を持たないニンゲンにとっては脅威でも、決して立ち向う事が出来ない相手ではないからだ。お互いにとって本気を持って殺しあう事は、どちらにとっても意味のあるものではないと、理解していたからである。

そのはずなのに、この数年モンスターたちの動きが活発になっていた。皆殺しにされた集落も一つや二つでは無い。明らかに、何かが変わっていた。ニンゲン達はそれを、急増・拡大させた軍で対処するしかなかった。そんな状況だからこそ、少女もそれなりの地位を手に入れる事が出来たのだった。

王城のある都市の北西部。彼女はモンスターを討伐する為にこの地に隊を率いていた。王城の守りが手薄にならないよう、限られた人数での討伐隊であったが、道中の成果はまずまずであった。いつもより気運が良いと、油断していた可能性は否めないが、それでも不可思議であった。

部下からの人望が薄い彼女が監視している時ならいざ知らず、信頼の厚い隊長が起きている時間だ。自分でそんな事を考え勝手に腹を立て、隊長はどこだ、と兵士に怒鳴る。兵士もそれがわかったので、不快な表情を隠そうともせず、わかりません！ と答えた。

わざと聞こえるような舌打ちをして、少女は隊長のテントへと駆けだす。寝巻代わりになっていた外套を脱ぎ捨て、隠れていた身体をさらけ出す。

身につけている防具と言えば、脚甲のみ。身体を覆うのは白色のアンダーウェアのみである。その褐色の肌とは対照的なその肌着は、ボディラインをくつきりと浮かび上がらせる殆ど下着も同然の物だった。幼さを残しながらも、引き締まった筋肉質の体を惜しげも無く晒す。それを気にする訳でも無く、野営地を進む。どうせ、女としての魅力など無い、と自分で思っていたから。何よりも、顔の左半分に残る深い傷跡が人を寄せ付けなかったからである。左目の視力をも失う事になったその怪我は、今よりもっと幼い日の事。辛うじて命は助かった、悪夢の出来ごと。

少女の名前は、ラガツアと言った。